

(国語科)

主体的に学び、思いや考えを伝え合うことのできる子どもの育成

大阪市立長池小学校

1. 研究主題設定の理由

本校の児童は、経年調査の質問紙の「国語科の勉強は好き」「授業内容がよく分かる」という質問に対して肯定的に答えた児童の割合が多かった。一方で、経年調査の国語科では、記述式の問題への空白が目立った。また、教員に実施したアンケートからも「自分の思いを言葉として表現することが苦手」であったり、「答えが決まってないことに対しての表現が消極的」であったりするという児童の実態が浮かんできた。

以上のことから、国語科を研究教科に取り上げ、自分の思いや考えを主体的に表現していける児童の育成に二年間取り組むことにした。

2. 研究の趣旨

一年目は、まず「話す・聞く」力を育てることにし、「対話的な学び」を中心に教育活動を行った。授業の中などで児童同士の「対話」を取り入れる機会を増やし、研修会や授業研究会、教材開発などに取り組んだ。この年の経年調査の質問紙の「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか。」という質問には肯定的に回答した児童の割合が大阪市平均や前年度を上回り、一定の成果を得た。

しかし、領域別の結果では「書くこと」の正答率が低く、「学校の授業などで、自分の考えを文章に書くことは難しいと思いますか。」という質問に対しての結果、7割近い児童が「書くこと」に対して苦手意識を持っていることもわかった。

よって二年目は、「書くこと」を中心に、児童が自分の思いを主体的に表現できる力を育成することにした。書き慣れることのできる場の設定や、児童の主体的な学習活動を促す工夫について研究してきた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点①基礎・基本の力を育成する手立ての工夫

○全校で共通事項の設定、指導・教室掲示を行う。

・「聞き方あいいうえお」「話し方かきくけこ」、声のものさし、ハンドサイン

○朝の学習の時間、週1回「国語タイム」を設定し、国語力を高める。

・学年の児童の実態に合わせ、語彙力を高める活動(三文スピーチ、読み聞かせ、漢字指導、視写等)の計画・実施

○全校作文を年3回実施する。各学級1作品を選出し、全校配付することで感想を共有する。

・「ナッケカーニバル」「運動会」「ナッケ田辺大根まつり」

視点② 主体的な学習活動を促す指導法の工夫

○最適な言語活動を選び、単元を通して意識した学習過程の展開を図る。

○自分の成長が見えたり、次時へとつながったりするような、「視点を明確にした『振り返り』」を行う。

視点③対話的な学びを深める工夫

○対話する場の設定や発問を工夫する。

- ・ペアトーク、グループトーク、全体交流
- ・自分の考えを持ち、話し合いたくなるような発問を考える

○自分の考えや他者の考えを可視化する。

- ・板書、ノート、メモ、ワークシート、付箋、思考ツール等の利用
- ・単元ごとに学びをまとめ、教室に掲示する。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

視点①基礎・基本の力を育成する手立ての工夫

○学校の共通事項として「ハンドサイン」や「声のものさし」を設定したことで、異学年交流やクラブ・委員会活動でも戸惑うことなく児童同士の対話につながった。

○学年の児童の実態に合わせた「国語タイム」を計画、実施することで、児童の語彙力や「書く」力、「話す・聞く」力などが高まっていった。

○全校作文を実施し、感想を共有することができた。同じ行事を体験しているので、自分の書き表し方と比較しやすく、友達の工夫を学ぶことができた。

視点② 主体的な学習活動を促す指導法の工夫

○児童に付けたい力に合った言語活動を選び、単元の計画を立て、児童に意識させながら学習活動をすすめることができた。

例（話す・聞く）3次で「朗読発表会」を設定し、意識しながら物語文の読み取りを行った。毎時間の読みを朗読に生かしたり、自主的に朗読の練習をしたりする児童が増えた。

（書く）3次で「リーフレットを書く」活動を設定し、毎時間読み取った筆者の書き方の工夫を自分のリーフレットに生かすことができていた。また、他の児童のリーフレットを読むときの視点にもなった。

○振り返りの視点を提示し、積み重ねることで、児童の考えの変容がわかりやすく、指導者の授業改善へとつながった。

○他教科と関連させたカリキュラム・マネジメントが児童の深い学びへとつながった。

視点③対話的な学びを深める工夫

○ペアトークやグループトークといった豊富な交流場面の設定を行うことができた。ジグソー法も有効であった。

○意見を持ち、話し合いたくなるような発問を行うことで、児童の話し合いが活発になった。

○付箋やメモを使い、自分の意見をまとめてから話し合うことで、安心して積極的に話し合う児童が増えた。また、人物関係図やイメージマップ、心情曲線などの思考ツールを使うことで、考えが整理、可視化され、話し合いを活性化することができた。

(2) 今後の課題

○「書く」活動の評価の在り方について、言語活動と合わせて一層具体化して考えていく。

○二年目は一年目に培われていたはずの「話す・聞く」力に課題が見られたので、今後も継続指導が必要。